論文

もう一つの兄弟団

一一労働者大学におけるラスキン、ロセッティ、そしてラファエル前派

横山 千晶

はじめに

ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) の活動を通して「教育」について語ることはあまりに基本的な作業である。彼は人々に「正しく見ること」を教えるために筆を執り続けた。積極的に講演活動を行い、著作を紐解けば、そこかしこに教育に関する論議が顔を出す。その教えは、ラファエル前派やデザイナーとしてのウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96) の活動に礎石を与えた。

同時にラスキンは実践的な教育者であった。個人的に描画を教えるのみならず、1854年から労働者大学 (Working Men's College) で素描クラスを無償で受け持ち、やがては1871年にオクスフォードにラスキン素描学校 (Ruskin School of Drawing: 現在のラスキン芸術学校 [Ruskin School of Art]) を開設する。

19世紀前半のイギリスがメカニクス・インスティテュートやデザイン学校の創設によって、ヨーロッパ諸国に後れを取っている製造業の巻き返しを図り、職業訓練に力を入れたのだとしたら、19世紀後半は1870年以降の初等教育と義務教育制度の整備に始まり、次第に全国民の教育そのものが大きく見直されていく時期となった。平行して、社会人教育や労働者教育も、中流階級の台頭や労働組合や協同組合運動の活発化を背景として、組織的な試みが展開されることとなる。代表として挙げられるものは1854年創立の労働者大学、1873年にケンブリッジで始まった大学拡張運動(University Extension Movement)、1884年開設のトインビー・

26 横山 千晶

ホール (Toynbee Hall)、1889年のナショナル・ホームリーディング・ユニオン (National Home-Reading Union)、1899年設立のラスキン・コレッジ (Ruskin Hall, のちにRuskin College と改名)、1903年に協同組合が大学拡張運動の協力のもとに開始した労働者教育協会 (Workers' Educational Association) などである。これらのプログラムや教育機関は協力・補完・あるいは反発しあいながら成長を遂げていき、その教育システムはイギリス各地、ひいては世界へと広がり、現在の大学公開講座や生涯教育、通信教育制度のモデルとして各地域と文化に根差した動きを展開していった。同時に労働者大学、トインビー・ホール、ラスキン・コレッジ、労働者教育協会は設立当時の精神に基づいて現在も新しい歴史を刻んでいる。

これらの組織の名称を見ただけでも、当時の社会思想家の考えが労働者 教育に何らかの影響を与えていたことが明らかであろう。ラスキンもその 一人である。本論考では労働者大学に焦点を当て、教師としてのラスキン と若いアーティストたちの関係、およびその関係を土台とした教育活動を、 ラスキン、そしてラスキンと共に労働者大学で描画を教えたロセッティを 中心に探っていくことにする。

1. 労働者大学 (Working Men's College) の開校と素描クラス

労働者大学(以後WMCと記述)の発端は、リンカーンズ・インの法廷弁護士、ジョン・マルコム・ラドロウ (John Malcolm Forbes Ludlow, 1821-1911) と当地に牧師として就任したばかりのキリスト教社会主義者、フレデリック・デニスン・モーリス (Frederick Denison Maurice, 1805-1872) が1849年から始めた貧困層救済をめぐる一連の話し合いだった。やがてチャールズ・キングズリー (Charles Kingsley, 1819-1875)、トマス・ヒューズ (Thomas Hughes, 1822-1896)、F・J・ファーニヴァル (Frederick James Furnivall, 1825-1910) らが参加し、貧困層のために何ができるのかを真剣に議論しあうことになる。彼らはフランスの労働者協会のような組織を設立するために、チャーティスト運動家の仕立て屋ウォルター・クーパー (Walter Cooper) の協力を得て、労働者協会促進組合 (the Society for Promoting Working Men's Associations) を発足させる。また協会会館を作

り、労働者階級向けのクラスや講演会を開催するようになった。このよう な一連の活動が、新たな教育機関の構想を導き出すこととなった。

ファーニヴァルによると、1854年の1月には「教育及び出版委員会 (Committee of Teaching and Publication)」が作られ、2月にモーリスが用意した大学設立の草案には以下のような目的がしたためられていた。以下、その6項目をファーニヴァルの記録から引用する。

- 1. They agreed that our position as members of a society which affirms the operations of trade and industry to be under a moral law—a law concerning the relations of men to each other, obliges us to regard social, political, or to use a more general phrase, *human* studies as the primary part of our education.
- 2. It was agreed that we were not bound to confine our education to our own associates, but that we should promote their interest better if we produced a scheme which should be available for the working classes generally. At the same time it was considered that we ought to do our utmost, that the members of each association should, as individuals, enter into the general scheme, and, so far as it was possible, that each association should be an integral part of it.
- 3. It was agreed that adult males (that is to say, males, at all events, not younger than 16) should be contemplated first and chiefly in our education; though it was thought very desirable that provision should in due time be made for the teaching of boys and of females.
- 4. It was agreed that <u>the education should be regular and organic, not taking the form of mere miscellaneous lectures</u>, or even of classes not related to each other.
- 5. It was also agreed that the teachers, and, by degrees, the pupils, should form an organic body, so that the name of College should be at least as applicable to our institution as to University College or to King's College.
- 6. It was determined that the College should, in some sense or other, immediately or ultimately, be self-governed and self-supported. . . .

(Furnivall, 1860a, 146; イタリックは原文のまま。下線強調は筆者による)

ここから読み取れる骨子は、カリキュラムは人文学を中心にするという こと、授業は有機的に組み立てられたものであり、それまで行われてきた 労働者向けの講演会のように横のつながりのない講義の集合体ではないということ、そして教員と学生が一体となってこの組織を作ることから、まさに「大学(college)」の名がふさわしいということである。

これらの趣旨に沿ってモーリスは続けてカリキュラムのたたき台を作成した。カリキュラムは人文系の授業で、内容は、政治 (Politics)、倫理 (Ethics)、言語 (Language)を中心にそれぞれ週1回の授業を行い、同じ夕方にそれらと緊密に結びつく歴史と文学の講義を行うというものであった。そこに3番目の分野として自然科目 (Natural Division) が加わる。木曜日の夜には「人体の仕組み (Human Frame)」、金曜日には「機械や道具 (Machinery, or the instruments which man wields)」、土曜日には「自然と人間の関係 (The Relations between the Physical world and man)」の講義が行われ、さらに素描、算数、そして音楽のクラスがこれらの3つの曜日の夕方にそれぞれ行われるというものであった (Furnivall, 1860a, 147)。その後レッド・ライオン・スクエア31番に校舎が構えられることになるが、実際のカリキュラムや教授陣をそろえるまでには開校直前まで議論が交わされていたことが、開設準備委員会の議事録から見て取れる。1

ラスキンが素描クラスの担当を提案してきたのは、おそらくこの最終段階になってからのことである。すでにラスキンの知己となっていたファーニヴァルは賛助会員になってもらおうとラスキンに寄付申込用紙を送っていたが、返事は何と教授陣にラスキン本人が参加し、素描のクラスを受け持つという提案だった。素描クラスの担当者はすでに会議で候補者の名前が挙がり、本人たちからも了承を得ていたというものの、大学側にとってこれは思ってもみないありがたい申し出だった。開校前日の1854年10月30日に開催された説明会のことを、ファーニヴァルは次のように回顧している。「参加者が階段を上がってくるときに私たちは、芸術における労働者の役割という副題がつけられた、ラスキン氏の『ゴシックの本質』の雄弁かつ高貴な章の抜き刷りを渡した。著者と出版社が快諾してくれたおかげだった。こうして、私たちは我々の教授陣の一人がどんな人物なのかを発表することができたのである」(Furnivall, 1860b, 168; 強調は原文のまま)。

翌日開校した労働者大学の初年次第一学期(11月からクリスマスまでの2か月)には以下のスケジュールが用意された。

Sunday Evening	$8\frac{1}{2}$	The Gospel of St. John	The Principal
Monday Evening	8	Public Health	Mr. Walsh and Mr. Hughes
	9	Geometry	Mr. Hose
	9	English Grammar	Mr. Furnivall
Tuesday Evening	8	Law of Partnership	Mr. Ludlow
	9	Political Terms illustrated by English Literature	The Principal
Wednesday Evening	8	Natural Philosophy and Astronomy	Mr. Locock
	9	Machinery	Mr. McLennan
Thursday Evening	7-9	Drawing	Mr. Ruskin
	8	Public Health	Mr. Hughes and Mr. Walsh
	9	English Grammar	Mr. Furnivall
	8	Arithmetic and Algebra	Mr. Westlake
Friday Evening	8	The Geography of England, as connected with its History	Mr. Brewer
	9	The Reign of King John, illustrated by Shakespeare's Play	The Principal
Saturday Evening	8	Vocal Music [This Class was not opened, applicants being referred to Mr. Hullah]	

図1 労働者大学初年次第一学期の時間割(労働者大学図書館蔵の資料より)

当初の予定だった人文主義的かつ有機的な授業の骨格が見えるのみならず、法律と文学(火曜日)、歴史と文学(金曜日)といった領域横断的な試みが実行されていることが分かる。平日の授業は8時~9時、9時~10時の1時間のスロットに分かれており、学生は各曜日に二つのクラスを履修することが可能だったと思われる。しかし例外は木曜日のラスキンの素描クラス

30 横山 千晶

である。こちらは7時から9時までの2時間を割り当てられているために、このクラスを履修した学生は、その後ファーニヴァルの「英語の文法」のクラスのみが履修可能だった。

開講当時の学生は130名ほどだったが、次学期には155名になり、クラスも前学期の14クラスから一気に23クラスに増えている。履修の選択が増え、英語文法と数学のクラスの増コマのほか、ラテン語1コマ、フランス語が2コマ開講されている。同時に素描クラスの人気を裏打ちするように二学期目からダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ(Dante Gabriel Rossetti, 1828-1882)とローズ・ディキンソン(Lowes Cato Dickinson, 1819-1908)が教師としてその名を時間割に加えられることとなった。

2. ロセッティ、労働者大学の教師陣に加わる

ディキンソンは大学構想時からモーリスたちに加わって設立準備を進めたメンバーだった。ディキンソン家はニュー・ボンド・ストリートに店を構える版画商兼写真屋で、ラファエル前派の機関誌『ジャーム(Germ)』の印刷も手掛けており、ローズ・ディキンソン本人はすでにロセッティと親交があった。肖像画家として活躍していたディキンソンが大学開設に先駆けて素描クラスのカリキュラム担当であったことは、話し合いの議事録からわかる。

一方ロセッティを素描クラスの教員として引き込むことは、開校前からラスキンが念頭に置いていたことのようである。1854年10月15日付のウィリアム・アリンガム (William Allingham, 1824-1889) 宛のロセッティの手紙によると、「石工たちを教える ("teaching the masons")」企画について相談したい旨の手紙をラスキンから受け取ったことが述べられている (Fredeman I: 388)。その話し合いは開校直後に実現したのであろう。1854年11月(おそらく12日)のアリンガム宛の手紙の中でロセッティはラスキンの熱意に感化され、WMCで教える決意を固めた様子を語っている。

もう彼[ラスキン]がモーリスの「労働者大学」の企画に参加したことは知っているだろう。大学はレッド・ライオン・スクエア31番に開校したばかり

だ。ラスキンは寛大にもそこで素描クラスを受け持って毎週木曜日の夜に教えているのだが、二人で教える計画についてかなり長い時間をかけて懇談した。ラスキンがあまりに熱心なので僕もその熱意に押されてしまった。落ち着いたら毎週一回彼と同じように教えようかと思っている。(Fredeman I: 394)

早速ロセッティとディキンソンは共にラスキンの木曜日のクラスに参加し、 学生に交じって描きつつ、ほかの学生の手助けをしていたようだ。

そして発表された大学の時間割には載せられていないものの、以下の1855年1月23日のアリンガム宛の手紙から、ロセッティはすでに初年次第二学期の始まった1月には月曜日に人物画のクラスを受け持っていることがわかる。最初のクラスは1855年1月22日の月曜日であった。

昨夜労働者大学でのクラスを始めた。人物画のクラスで、葉っぱを描かせているラスキンのクラスからは全く独立している。学生の一人をモデルとして選び、今度は自分たちで次のモデルを選ばせている。自然に則して描くように指導を心掛けるつもりだ。そして、何人かは――2,3人だが――確かな素質を備えているし、ほとんど全員が期待していた以上の才能を見せている。ラスキンのクラスは驚くべき速さで進んでいるので、どうにか後についていくようにしなければ。クラスは本当に家族のような親密さ(a family footing)を基に進められるので、間違いなく楽しくなると思う。(Fredeman II: 7-8)

ロセッティにとってこの試みは満足のいくものであったようだ。三学期目の時間割にはロセッティの月曜日のクラスが正式に発表されることになり、ラスキンに次いで教員評議会に名を連ねることになる。ロセッティはその後、1858年まで定期的に教え、その後も不定期に1862年まで教え続けた。

3. 広がる教師陣:ラファエル前派関係者の参加

ロセッティは学籍係のトマス・ショーター宛の手紙 (4月24日付) で初年次第四学期の自分のクラスの科目名を「人物画 ([Drawing] for the figure)」から「人物画 ——、自然に則して、あるいは自然に則して作られた石膏像

32 横山 千晶

を使って (The Figure, from Nature & casts after Nature)」としてほしいと頼むと同時に、「二人の友人」、ラファエル前派のメンバー、トマス・ウルナー (Thomas Woolner, 1825-1892)と、同じくラファエル前派の運動にかかわったアレグザンダー・マンロー (Alexander Munro, 1825-1871)を紹介し、二つの塑像クラスの開講につなげている (Fredeman II: 33)。WMCの教員評議会議事録を見ると、ロセッティが初めて会議に出席した1855年5月5日にはウルナーとマンローの二人が塑像クラスを担当し、教員評議会のメンバーになることが可決されている (Minutes)。

このショーター宛の手紙の中で月曜日と木曜日の素描クラスを避けて、ウルナーのクラスを火曜日に、マンローのクラスを金曜日に設置することを申し出ているところからも、ロセッティが独自の教育的なメソッドを考えていた様子がうかがわれる。彼は自分の「人物画」のクラスと塑像クラスの有機的なタイアップを考えたのだろう。ウルナーとマンローのクラスで造形した塑像を自分の素描クラスに役立てることをロセッティは目指したのではあるまいか。

しかし残念ながら塑像クラスは数年後にはなくなってしまう。ウィリア ム・E・フリードマン (William E. Fredeman) が編集した『ダンテ・ゲイブ リエル・ロセッティ書簡集 (The Correspondence of Dante Gabriel Rossetti)』第2 巻では、上の手紙に付した注の中で履修者の減少から(確かに開講当時は 15名の履修者がいたが、翌年度の1学期には6名まで落ち込み、あとは5 名を超えることがなかった) このクラスは「明らかな失敗 (distinct failure) | であったと結論付けているが (Fredeman II: 33 n3)、どうやらその裏には ラスキンによる働きかけがあったと推測される。というのもファーニヴァ ルは、塑像の授業は、台所がそのまま作業所と化すほどの盛況ぶりだっ たと記録しているのだ。しかし、ラスキン自身は、素描と塑像の二つを同 時に身に着けることはできないとの理由で、塑像クラスの導入には批判的 だったという(Furnivall, 1860c, 189)。結局金曜日のマンローのクラスはほ どなくして閉講され、ウルナーとマンローが共同で教えていた火曜日のク ラスも4年目になくなってしまう。しかしその後もウルナーとマンローは、 WMCの教員評議会のメンバーとして大学にかかわり続け、ウルナーは校 長のモーリスをはじめとし、WMCの教員や評議会のメンバーたちと親交

を保ち続けた。ロセッティの目論見はおそらく頓挫してしまったとはいえ、 ラスキンがどれほど労働者大学の授業に打ち込んでいたのかを垣間見ることができるエピソードである。

その後もロセッティの声掛けで若いアーティストたちがWMCに教師 陣として加わっていった。忙しくなったロセッティの代わりに5年次一 学期(1858年)の月曜日クラスを教えるようになったのは、『労働(Work)』 (1852-65)の絵の中にモーリスを描いたフォード・マドックス・ブラウン (Ford Madox Brown, 1821-1893) である。そして次学期の金曜日にはエド ワード・バーン=ジョウンズ (Edward Burne-Jones, 1833-1898) を教師とし て迎え入れている。ちなみに1856年にバーン=ジョウンズが初めてロセッ ティを訪れたのもこの労働者大学であった。このようにして、ラファエ ル前派にかかわりのあるアーティストたちが次々とWMCに引き込まれて いった。ラスキンをその核とした労働者教育を通じて、ラファエル前派の ネットワークが強まっていったといっても過言ではないだろう。結果とし て1859年度第二学期の教師陣のラインナップは、月曜日の人物と動物画を ブラウン、火曜日の基礎と風景画をディキンソン、木曜日の風景画をラス キン、金曜日の人物と動物画をバーン=ジョウンズが受け持つという充実 ぶりである。(のちにはヴァル・プリンセプ [Valentine Cameron Prinsep, 1838-1904]、W・ケイヴ・トーマス [William Cave Thomas, 1820-1884]、 アーサー・ヒューズ [Arthur Hughes, 1832-1915] らも労働者大学で教える ようになる。)また、教師陣に名前を連ねなくとも、ラファエル前派関連の 芸術家たちがラスキンのクラスに参加していたことは、学生の手記からわ かる。2

これらの芸術家たちのサポートを務め、のちには自らクラスを受け持つようになったのが、素描クラスの才能ある学生たちである。月曜日のブラウン、金曜日のバーン=ジョウンズのクラスは、ラスキンとロセッティの学生で、のちに風景画家となる J・P・エムスリー (J. P. Emslie, 1839-1913) が共同で教えるようになり、ラスキンが教えた二人の生徒、ウィリアム・ウォード (William Ward, 1829-1908) とジョージ・アレン (George Allen, 1832-1907) も学生の身分のまま教師陣に加わっていく。この二人はやがて、出版においてラスキンにとってなくてはならない存在となる。ラスキンは

労働者大学を通じて自らの理論が実践に移される現場を作り上げ、理想の 実践家を育て上げていったと言えよう。³ この二人以外にもラスキンは才 能ある学生たちを海外に送り、スケッチを委託している。ファーニヴァルは、 ラスキンの学生で、のちにイタリアやスイスでの素描を委託されるように なるジョン・バニー(John Wharlton Bunney, 1828-1882)の手によるJ・M・ W・ターナー(Joseph Mallord William Turner, 1775-1851)の模写や、雲の スケッチを教室で見たことを記録している(Furnivall, 1859, 121)。これら の作品を実際にラスキンは自らのクラスでも教材として使ったのであろう。

4. ラスキンとロセッティの教授法

4. 1 自然に則して描く

開校3年目の1857年には、労働者大学での授業を土台として、ラスキンの『素描の基礎 (The Elements of Drawing)』が出版される。ではクラスの中での具体的なメソッドはどのようなものだったのだろうか。ラスキンは一人ひとりに個人的な指導を行い、それぞれの才能に合わせた教授法を採用していた。また各人に異なる素材を使って教育に当たった。ラスキンの学生であったトマス・サルマンは次のように回想している。「ある学生のためには水を入れたタンブラーの中に煙水晶のかけらやホタル石を入れて、深紅やアメジスト色の複雑な石目を描かせた。またほかの学生のためにはアナーリーの森から地衣やキノコを持って来るのだった」(Sulman 548)。

開設当初は2時間だったラスキンの授業は、履修者の増加に合わせてやがて2時間半となり、5年目 (1859年)の二学期 (1月9日~3月5日)からは、7時から10時までの3時間となった。またラスキンは、水彩画家のウィリアム・ヘンリー・ハント (William Henry Hunt, 1790-1864) に頼んで絵を描いてもらい教材として使っている。その目的は、実際にクラスで使っているような単純な対象物であったとしても、プロの画家たちがその対象といかに奮闘し、そこから芸術と呼べるものを生み出すのか、その過程をじかに説明するためであった (Haslam 153)。

このラスキンの教授法は、サウス・ケンジントンで進められていたデザイン学校の教育システムの事実上の否定である。例えばロバート・ヒュ

イソン (Robert Hewison) はデザイン学校の機械的な技術教育とラスキンの有機的なアプローチを対比している (Hewison 9)。前者がアウトライン (outline)、陰影(shade)、色彩(colour)の順序で教授法を組み2次元のフラットなデザインを基調としていたのに対し、ラスキンは自然のままに「見る」という過程を大切にし、マッスと色彩を土台としていたことは、上のサルマンの引用からもわかる。同時にそれは、アウトラインではなく、3次元的な陰影を意識することであった (Hewison 35)。再びサルマンの話に耳を傾けてみよう。

私たちは漆喰で作ったボールをまず描いた。ボールはたくさんのガス灯で 照らされていくつもの交差する影がつけられていた。それから自然の葉っ ぱを基にした小さな漆喰の型を描き、その後に自然そのものへと目を向け ていった。乾燥させた月桂樹の葉の小枝、羽毛、少し裂け目の見える羽根、 などありとあらゆる自然の構造物である。それからラスキンは私たちを色 彩に進ませていく。ガス灯が色彩の明度を様々に変化させていくことに気 を付けるようにと促しながらも、この複雑な色彩はあまりに美しいので、 まずはここからはじめなくてはならないのだと言う。(Sulman 548)

このような独自の教授法を展開していたラスキンが、ロセッティに自由な授業運営を任せていたことは注目してよいだろう。5年次の第一学期から、フォード・マドックス・ブラウンにクラスを引き継いでくれるように頼むロセッティの以下の言葉は、そのことを裏付けている。「もちろん、僕のクラスはまったく独立したものだ。僕以外、ラスキンもほかの誰もその内容を知りはしない。だから君の場合も全く同じだよ」(Fredeman II: 233)。

おそらくこの自由裁量は、WMC開校直後に教授法に関して長時間話し合った結果、共有された思想が根底にあったから可能となったのかもしれないが、先に引用した1855年1月23日のアリンガム宛の手紙の中でロセッティが述べた「自然に則して描くように指導を心掛けるつもりだ (I intend them to draw only from nature)」という言葉をラスキンが全面的に信頼していたため、と取ることができる。これはラスキンがラファエル前派の中に見ていた真髄であった。

また、サウス・ケンジントンの教育法に反対するラスキンの路線をロセッ

ティも共有していた。ロセッティも2次元的なアウトラインを拒絶し、マッスと3次元的な陰影をその教育の土台とした。サルマンは次のように回想する。

彼[ロセッティ]は鉛筆によるアウトラインを認めなかった。彼はよく言ったものだ。「濃淡によるマッスこそが素描を作る。そこから始めるんだ。まず気を付けなくてはならない最初のことは、一方向から見た鼻の濃い色合いとなる部分。だからその部分を陰として色を置く。それから頬と顎の色合いを添えるんだ。」彼は推測だけに基づく素描は不誠実であると考えていた。一度私が瞼の返しを描きこんだら、彼は言った。「そんな頭だけで考えた戯けはさっさと捨ててしまえ!見えるものだけを描くんだ」。(Sulman 549)

学生たちがこのような3次元的な造形への意識を培うことができるようにと、ロセッティが早々にウルナーたちの塑像のクラスを企画したのだろうことが、この記述からわかる。

ほかの学生も、ロセッティはとにかく見たままを描くことと、最初から色彩への意識をもって取り組ませたことを回想している (Fredeman I: 400n1)。その色彩感覚は、ロセッティに教室の環境そのものをデザインするという機会を与えたのかもしれない。現存している学生の「意見帳」を見ると 1857年11月4日のエントリーにこんな提案が記されている。「ロセッティ先生の描画クラスの教室を、緑かその他落ち着いた色の壁紙を貼るか塗装していただけるように提案します。現在の赤色は学生の目に痛烈すぎます」 (Students Suggestion Book, 4 Nov. 1857)。この提案への反応はわからないが、ロセッティのクラスの雰囲気を伝えるエピソードである。

4. 2 半学半教の場としての素描クラスと新たな兄弟団

もう一つ重要な点がある。教えることは若手アーティストが技術を磨く 半学半教の機会となったということである。ロセッティ自身、学生と共に 実践に取り組んだ。そして自らが教師でありながら、共に描くことの効 果をウィリアム・ホルマン・ハント (William Holman Hunt, 1827-1910) に 次のように語っている。「僕もそこで描いている。そしてこのことは僕自 身にとってだけではなく、学生にとっても何にも代えがたく重要な価値を持っている」(Fredeman II: 14)。

またロセッティやディキンソンたちはラスキンの授業に学生と共に参加し、実践を通して学生たちに制作のモデルを提示した。4 ロセッティがバーン=ジョウンズやアーサー・ヒューズらを労働者大学に引き入れたのも、教えながら自分の腕を訓練する場がそこにあったからではないだろうか。

ロセッティの言葉を借りれば、そうすることで学生との間に醸し出される「家族のような親密さ」は、一方通行の教授法とは異なる親密な雰囲気を作り出し、教える側と教えられる側の垣根をあいまいにする効果を発揮したのだろう。これは先に引用したモーリスによるWMC設立の趣意に沿うものでもあった。同時に外から連れてきたモデルではなく、クラスメイトの顔を互いに描くメソッド自体が、学びあい教えあうことの基礎であり、自然に則した方法であり、ラファエル前派やモリス・マーシャル・フォークナー商会に見られる兄弟団的な雰囲気がクラスの中に持ちこまれた表れと取ることができる。つまり新たなブラザーフッドが教師陣と学生、そして学生間で培われていたということである。5

教師と学生の間の距離感はロセッティとラスキンのクラスを隔てるものでもあった。ラスキンがすでに偉大なる教師として学生たちの敬愛と尊敬を集めていたのだとしたら、ロセッティはむしろその垣根を積極的に壊そうとした。それは教師自らが学生の中に入って描くということだけではない。「正しく見る」という目標のもとに、ロセッティはクラスの中で、学生とともに色彩、絵筆の使い方、絵の具の使い方などの新しい方法を試した。クリスティン・マホニー(Kristin Mahoney)の言葉を借りればそれは「可視化された感覚表現(concretely sensuous representations)」につながるものである。

ラスキンの素描クラスが複雑な細部に忠実であることを重視したのに対し、ロセッティのクラスは熱情的な生命力を描くための「素晴らしき色彩」と非常に身体的なアプローチに焦点を置いていた。ロセッティは学生たちに新たに研ぎ澄まされた視覚を、可視化された感覚表現へと応用することを教えたのである。(Mahoney 228)

このことは、学生のみならず画家であり、詩人であるロセッティにも作用を及ぼした。絵画は自然そのものにはなれない。しかしそこに少しでも近づこうとする努力と新たな感覚と表現の体得が、ラスキンとロセッティの素描クラスの核であったと言える。その果たされることのない願望が、Mahoney(2010)が論ずるようにロセッティの作品に表されているのだとすれば、WMCでの経験はロセッティの創作のインスピレーションとなったのである。6

4. 3 労働者大学とモリス・マーシャル・フォークナー商会

こうして醸成されていくブラザーフッドを今度はWMCの外に持ち出す試みとして、ロセッティがどうやら、ウィリアム・モリスたちと新たに展開し始めたモリス・マーシャル・フォークナー商会 (Morris, Marshall, Faulkner & Co.) の企画にWMCの学生たちを引き入れようと考えていたことがうかがわれる資料が、現在WMCに残っている。⁷

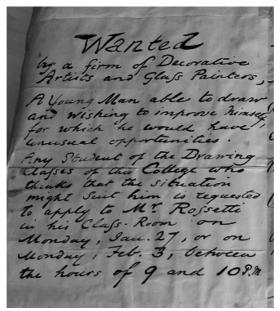


図2 労働者大学に残っている掲示告知(労働者大学図書館蔵)

Wanted

by a firm of Decorative Artists and Glass Painters, A Young Man able to draw and wishing to improve himself, for which he would have unusual opportunities.

Any student of the Drawing Classes of the College who thinks that the situation might suit him is requested to apply to Mr. Rossetti in his Class Room on Monday, Jan. 27, or on Monday, Feb. 3, between the hours of 9 and 10 p.m.

これはWMCの掲示板に貼られた告知だが、ファイリングされている前後の資料から察するに1862年の1月に貼り出されたものと思われる。ちょうど商会が設立された翌年に当たることから、ここで言われている「ある商会(a firm)」とはモリス・マーシャル・フォークナー商会のことであるのは間違いない。実際にこの掲示板に応えた学生がいたかどうかは今残されている資料からは判断できないが、先に引用したロセッティの手紙からも商会のメンバーに迎えたいとロセッティが考える学生がいたであろうことは想像に難くない。

これはラスキンが自らの素描クラスの中でウォードやアレンといった才能豊かな学生たちに「教える」ことを念頭に置いた教育を行い、実際に学生教員としてクラスを受け持たせ、活用するようになる現場をロセッティが見ていた影響かもしれない。事実ロセッティはジョージ・アレンに商会への参加を呼び掛けたようである。アレンがのちにJ・W・マッケイル(John William Mackail, 1859-1945)に語ったことによると、インダストリアル・アートの分野が立ち上がってきた当初、ロセッティはモリスと行おうとしている計画への参加をアレンに依頼したが、すでにラスキンの下で働くことが決まっていたために、彼はこの申し出を断ったという(Hilton 240)。この一枚の掲示は、ロセッティがモリス・マーシャル・フォークナー商会という新たなブラザーフッドに仲間を迎え入れる窓口としてWMCをとらえていたことの証左であろう。

おわりに

もともと宗教的な見地ではお互いに相容れなかったモーリスとラスキンは、WMCの運営に関しても互いに距離を保っていた。教員評議会の議事録を見ると、素描クラスに関すること以外でラスキンが積極的に意見を述べた形跡は見当たらない。しかし、素描クラスや芸術関係のカリキュラムに関しては、ラスキンは会議に出席できないときは手紙をしたためて積極的に運営に関与している。

素描クラスはラスキンを中心として自由な運営が任されていた。ただし、それはモーリスが芸術教育に無関心だったためとする見解は正しいとは言えない。8 確かに芸術一般に関して自分は専門ではないと認めながらも、労働者教育における芸術の意義をモーリスは強調していた。1858年12月27日に行われた学生への講演でモーリスは、ラスキンが教える素描や様々な分野の芸術の知識が自分に欠けていること、そして教員評議会の中では「芸術(art)」の位置づけが難しいとする委員がいることを認めたうえで、芸術こそは労働者たちが真っ先に学ぶべき科目であると述べている。モーリスは"Artisan, Artificer, Artist"という言葉が今は区別されて使われているものの、元来密接に関係しあっているのであり、芸術を学ぶことはその関係と今の違いを探るきっかけとなると言う(Maurice 6; 強調は原文のまま)。それは労働者としての技術の中に芸術を見出す行為でもある。

労働者に新たな視点を与えるという芸術の意義を、ラスキンも同じく強調した。ラスキンは自分のクラスを「大学のクラスの中で最も役に立たないもの(the most useless of any in the College)」と呼んだ。「しかし、描くことを学ぶ真の意義は私たちが身近なものを見る時に感じる喜びを研ぎ澄まし、増幅させることなのです」とラスキンが学生に呼びかけたことが記録されている("News" 177)。その意味で、描くという技術は誰もが身に着けるべきものであった。同時にラスキンが一人ひとりの指導に熱心であったことから、授業が一つのギルドとして機能していたと理解することも可能だろう。つまり万人に等しく同じ技術を与えるのではなく、個人の能力に合わせた教育を行うこと、そして自らの理論を実践できるものの能力をさらに伸ばすことがラスキンの教育の核にあった。だからこそ、デザ

イン学校で実践されていた試験や競争という一定の基準による評価は、ラスキンにとって意味のないものでもあった。

1860年代に入ってラスキンもロセッティも次第に労働者大学から身を引くことになり、次の活動へと移っていった。やがて労働者大学にかかわっていた芸術家たちがWMCを「卒業」していくと、労働者大学の芸術教育もサウス・ケンジントンとの関係を強めていくことになる。しかし、ラスキンたちが実践した芸術教育は、その後生まれる労働者教育機関の芸術教育に大きな影響を与え、引き継がれていくことになった。9 今も歴史を刻むこれらの機関の芸術教育と教育概念にその教えが脈打っていることは、150年以上の歳月に彼らの教えが耐え、今も有効であることの証なのだろう。

注

- 1 ロンドン・メトロポリタン・アーカイブス (London Metropolitan Archives) に残されているWMC 開校前の議事録を見ると、大学の設立趣意書もカリキュラムもその後練り直されていることがよくわかる。たとえば1854年6月20日の議事録を見ると、カリキュラム案として、日曜日は「キリスト教のモラル、自然界と神学の関係」、月曜日「政治、歴史、地理学」、火曜日「言語、文学、演説法」、水曜日「音楽、素描」、木曜日「人体の仕組み、保健」、金曜日「機械、算数、幾何学」、土曜日「自然科学」となっている (Minutes, 1854年6月20日)。
- 2 素描クラスの学生だったトマス・サルマンは、ラスキンのクラスにロセッティ に影響を受けた画家ジェイムズ・スメサム (James Smetham, 1821-89) が学 生として参加していたと書いている (Sulman 547) ほか、ウィリアム・リン ジー・ウィンダス (William Lindsay Windus, 1822-1907) が一度教えに来た と記憶している (Sulman 551)。ラスキンやロセッティのクラスに参加したり、 学生たちに助言を与えたラファエル前派関係の画家たちはほかにもいたで あろうことが予想される。
- 3 ウォードの回想によると、一人ひとりの指導を大切にしていたラスキンは、 クラスで教えることを念頭において、才能ある学生たちに教授法の教育も 行っていた(Ruskin and Ward 17)。
- 4 サルマンはこのように書いている。「一度、ラスキンは天使に羽根を付ける ことを拒否したが、どのように羽先を描いたらよいのかを示すために、教

- 室に鳥の[死骸が]入った大きな籠を持ってこさせた。そこには立派な雄雉、マガモ、ヤマウズラ、モリバトやそのほかの鳥が入っていた。それからラスキンはロセッティとローズ・ディキンソンとスメサムに学生たちへの手本を描いてみなさいと挑んだ」(Sulman 549-550)。
- 5 サルマンによると、ラスキンとロセッティたちがWMCから離れたあとも 人物モデルを描くことは続けられたが、外部からプロでない人々を連れて きて描くことになった。「昔の団結力はなくなってしまった」と彼は述べて いる(Sulman 551)。
- 6 マホニーは、ロセッティがWMCで教えている間に"The Blessed Damozel" の原稿を推敲する過程に注目する。強調されていくテーマは、充たされることのない願望と、それでもなおかつ追い求める強い思いである。
- 7 WMCの掲示板に貼られた告知などの資料は、現在WMCの図書館の中の スクラップブックに保管されているが、資料名はついていない。
- 8 たとえばヒルトンは、WMCの設立にかかわったモーリスやキングズリーのような人々は誰も芸術を教えることが重要であると考えていたとは思えない、と述べ、ラスキンも大学の運営にはほとんどかかわらなかったと述べている(Hilton 203)。
- 9 建築家のアルフレッド・マンスフィールド・ブルックス (Alfred Mansfield Brooks, 1870-1963) は、WMCのラスキンのクラスは1873 年から始まる大学拡張運動の素描のクラスに影響を与えたと述べている (Ruskin and Ward 18)。

引用文献

- Fredeman, William E., editor. *The Correspondence of Dante Gabriel Rossetti: The Formative Years, 1835-1862, Charlotte Street to Cheyne Walk*, vol. I (1835-1854), D. S. Brewer. 2002.
- The Correspondence of Dante Gabriel Rossetti: The Formative Years, 1835-1862, vol. II (1855-1862), D. S. Brewer, 2002.
- Furnivall, F. J. "Our Conversazione." *The Working Men's College Magazine*, vol. 1, no. 7, 1859, pp. 120-22.
- ——. "History of London Working Men's College." *The Working Men's College Magazine*, vol. 2, no. 21, 1860a, pp. 144-48.
- -----. "History of London Working Men's College (Continued from page 148)." *The Working Men's College Magazine*, vol. 2, no. 23, 1860b, pp. 165-70.
- ----. "History of London Working Men's College (Continued from page 170)."

- The Working Men's College Magazine, vol. 2, no. 24, 1860c, pp. 188-92.
- Haslam, Ray. "Looking, Drawing and Learning with John Ruskin at the Working Men's College." *Histories of Art and Design Education*, edited by Melvyn Romans, Intellect Books, 2005, pp. 145-59.
- Hewison, Robert. Ruskin and Oxford: The Art of Education. Clarendon Press, 1996.
- Hilton, Tim. John Ruskin. Yale University Press, 2002.
- Mahoney, Kristin. "Work, Lack, and Longing: Rossetti's 'The Blessed Damozel' and the Working Men's College." *Victorian Studies*, vol. 52, no. 2, 2010, pp. 219-248.
- Maurice, F. D. "Introductory Lecture on the Studies of the (London) Working Men's College." *The Working Men's College Magazine*, vol. 1, no. 1, 1859, pp. 1-8.
- "News." The Working Men's College Magazine, vol. 2, no. 23, 1860, pp. 177-78.
- Ruskin, John, and William Ward. John Ruskin's Letters to William Ward. Marshall Jones Company, 1922.
- Sulman, Thomas. "A Memorable Art Class." Good Words, Jan. 1897, pp. 547-51.
- The Working Men's College. Minutes of Meetings in Relation to the College for Working Men, 31 Red Lion Square, 1854 (May 1854 to May 1855). (LMA/4535/B/01/01). London Metropolitan Archives, London, UK.
- The Working Men's College. *Students Suggestion Book* (June 30 1855 to June 7 1867). (LMA/4535/E/04/01/001). London Metropolitan Archives, London, UK.

---慶應義塾大学教授

Summary

Another "Brotherhood":

Ruskin, Rossetti and the Pre-Raphaelites at the Working Men's College

Chiaki Yokoyama

John Ruskin surprised the founding members of the Working Men's College (WMC), who were busy with the final stage of opening the College in 1854, by offering to teach drawing at the College. However, no sooner had he started teaching there, than he began extending his plan to persuade Dante Gabriel Rossetti to join him in teaching drawing classes at the College. The young protégé soon created his own class of figure drawing separate from Ruskin's. Not only that, it was Rossetti who introduced another member of the Pre-Raphaelite Brotherhood (PRB), Thomas Woolner, and a PRB ally, Alexander Munro, with the aim of establishing Modelling Classes. It seems that Rossetti tried to create a systematic pedagogy of teaching art at the WMC, using the PRB network.

Subsequently, in 1859, Rossetti also introduced Ford Madox Brown and Edward Burne-Jones to the College as instructors, with Val Prinsep, W. Cave Thomas, and Arthur Hughes following later. This PRB-related network within the College was made possible thanks to the autonomy Ruskin was permitted in the administration of the drawing class in the College curriculum. In turn, Ruskin extended this autonomy to other young instructors who joined the College.

What then was the influence of Ruskin and his teaching on the education provided by the WMC? And what was the nature of his influence regarding the other PRB members, especially Rossetti? Furthermore, what were the elements that attracted young artists to teach at the WMC? This paper will investigate the Ruskin and the Pre-Raphaelite connection in the WMC, focusing on their methods of teaching and their involvement at the College.